

2021年8月1日

大井バプテスト教会

説教題「新しい神殿の幻」エゼキエル書 47章1～12節

主任牧師 加藤 誠

**「川が流れて行く所ではどこでも、群がるすべての生き物は生き返り、魚も非常に多くなる。この水が流れる所では、水がきれいになるからである。この川が流れる所では、すべてのものが生き返る。…水は聖所から流れ出るからである」(エゼキエル書 47章9節、12節)。**

一昨日の7月30日、松井建設に本体工事代金の残額を支払い、新礼拝堂の建物の引き渡しを受けました。昨年の七月末に始まった旧礼拝堂の解体と新礼拝堂建築のすべてのプロセスが守られ感謝の思いでいっぱいです。礼拝堂敷地の下から埋設物や井戸跡が見つかるなど想定外のこともありました。大岡山建築設計研究所による設計監理、そして松井建設の丁寧な施工により、大きな事故なく新しい礼拝堂の建物が完成に導かれたことを、何よりも主なる神に深く深く感謝いたします。

一日も早く、新しい礼拝堂で教会員の皆さんと一堂に会し、教会学校の子どもたちやご家族と一緒に主を礼拝したい思いでいっぱいですが、「第五派」と呼ばれる、深刻なコロナの感染状況を考えると、もうしばらく時間が必要なようです。主が最もふさわしい時を備えてくださると信じ、もう少し祈りを重ねていきたいです。

新しい礼拝堂の建物は、私たちの要望をすべて満たすものではありません。人間的な思いで見ると、「もっとこうだったら」という部分が目に付くことでしょう。しかし敷地の制約や資金的制約、さまざまな経緯によって導かれ与えられた建物を、「主なる神が備え、大井バプテスト教会に与えてくださった建物」として大切に感謝して受けていきたいのです。建物は大切ですが、福音宣教に決定的なものではありません。初代教会の人びとはさまざまな制約や障害がある中で、時には建物がまったくない時にも大いに喜んで、知恵を働かせ工夫して主を証ししていきました。第一に求められるのは新礼拝堂を主から与えられた新しい器として感謝し受け取り「あなたの御名のために用いさせてください」と祈っていく信仰です。大谷レニー先生だったら何と言われるだろうかと思案する時に、きっとレニー先生は言われるでしょう。「いつも喜び、絶えず祈り、すべて感謝しなさい。これがイエスさまが教えてくださった一番大切な信仰です」と。この「いつも喜び、絶えず祈り、すべて感謝する信仰」がなければ、どんなに立派な建物も礼拝堂にはなりません。「神さま、礼拝堂を礼拝堂にしてください」とあけぼの幼稚園の子どもたちが祈った祈りに学びつつ、私たちもまっすぐに神さまに感謝と賛美をささげていきたいのです。

さて預言者エゼキエルは、エルサレム神殿が廃墟と化したのを見て深く落胆し、希望を失っていたイスラエルの人々に「新しい神殿の幻」(40章以下)を語るように示されます。「新しい神殿の幻」は、それまでイスラエルの民が慣れ親しんでいたソロモン王の建造の長方形の縦長の神殿ではなく、東西南北に正方形の建物でした。不思議なことに、聖所の敷居の下からは「命の水」が湧き上がり豊かに流れ出

て(47章)、すべての生き物を生き返らせ、川のほとりに生えているあらゆる果実の木が生き活きと葉を繁らせて月ごとに果実を実らせるというのです。

もちろんこれは「幻」であって実在の神殿ではありません。新しい神殿の霊的な働きを「幻」で表現したものです。神殿、つまり礼拝堂とはどういうものか。それは「霊的な命」、神さまから注がれる「命の水」が流れ出て、「すべてのものを清め、すべての生き物が生き返らされていく」場所であるということです。

主イエスは言われました。「渴いている人はだれでも、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人のうちから生きた水が川となって流れ出るようになる」と(ヨハネ7:37-38)。水は、毎日必要です。水なしに私たちは生きることができません。同じように毎日、神さまから霊の息吹、御言葉をいただかないと私たちは生きられません。信仰というものはその日その日に上から与えられるものです。それを忘れた時、その人の信仰は干からびてしまいます。「神さま、今日、生きるための御言葉を与えてください」と祈り求めるところに、主は聖霊の息吹を注いでくださるのです。昨日までイエスを罵倒していた者にも、今日聖霊が注がれるなら「十字架のイエスこそ、わが主なり」の告白が与えられ、新しい人として生まれ変わります。使徒パウロが証している通りです。今回のオリンピックではSNSによる選手への中傷が問題となっています。「消えろ」「死ね」「お前はメダルを盗んだ」。怒りや憎悪が込められた人の言葉は他者を深く傷つけ殺します。しかし主なる神の言葉には人を生かす真実の愛が込められているゆえに、たとえ厳しい言葉であってもそれは人を生かし、清め、どんな暗闇の中でも立ち上がらせる力を持つのです。パウロの信仰は自身の努力で獲得されたのではなく、ただ主の憐れみによって注がれました。信仰は上から与えられるものであるゆえに、私たちにはいつも大きな希望がある、どんな時にも主の慈しみが私たちを生かしてくださることを覚えたいのです。

この「命の水が流れ出る新しい神殿の幻」(47章)がイスラエルの民に生き活きと示された時、彼らは荒廃した地であってなお、主の御名を賛美する信仰に導かれていきました。歴史的にはこのバビロン捕囚の一番困難な時に、イスラエルの民は「聖書信仰」に導かれます。捕囚前のイスラエルの信仰は「神殿信仰」「動物の犠牲信仰」が中心であり、聖書を読むことは補佐的な役割でしかありませんでした。極端な場合には、聖書の巻物は神殿の奥の部屋で読まれることなく埃をかぶっていたのです。しかしエルサレム神殿を失い、異教徒の地に捕囚となっている間に、人びとは改めて「創世記」からの神さまの恵みと救いの歴史を「聖書」として書き記し、毎日の礼拝の中で「聖書」を朗読し、その御言葉によって神さまを礼拝する「聖書信仰」がイスラエルの民に根付いていきます。そして「聖書」の御言葉こそが、人びとの霊的な命を豊かに養い、「命の水」として人びとを清め、生き返らせていくものであることを学んでいったのでした。

新しい礼拝堂をいただいた私たち。その建物を「礼拝堂にしていく信仰」(御言葉を求めていく信仰)を日々、主の前に切に求めていきたいのです。